産業をさかんにした人

今から165年ほど前、門田村の森脇定治郎という人が、初めて八千代区で高野どうふを作ったそうです。その孫の孝太郎さんもいろいろと工夫を重ねて、八千代にとうふ作りを広めました。

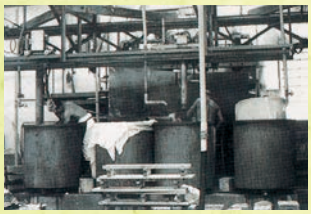
門田村の森脇定治郎さんは、初めて高野どうふを食べたとき、おいしかったので、これをこの地方でも作ってみたいと思いました。冬は寒く、北西の冷たい風がふき、雪の少ないこの地方は、高野どうふを作るのに合っている気候だと、定治郎さんは思ったのです。そこで、ひとりで奈良県の高野山まで行き、高野どうふの作り方を勉強して帰りました。そして、嘉永５年（1852年）、今からおよそ170年ほど前、門田村に、初めてとうふ工場を作りました。

それから大和にもとうふ工場が出来て、少しずつとうふ工場がふえてきました。八千代の高野どうふは、全国各地でよく売れ、有名になっていきました。それにつれて、多くの人がとうふを作るようになりました。

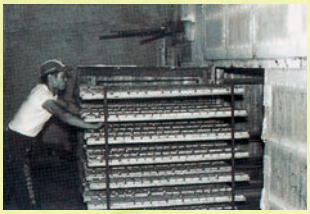
孝太郎さんは、さらにやわらかくおいしいとうふ作りを研究し、とうふ組合で共同で加工して出荷するようになりました。

多いときには八千代区で163戸のとうふ工場がありました。明治の後半から大正、昭和の30年ごろまでは、100をこえる多くの工場がありました。

機械によって大量に作る会社ができた



大豆をつぶしてにる。それをしぼっておからと豆乳に分ける。豆乳とにがりをまぜているところ。



冷凍庫に入れてこおらせる（昔は外に出していた）。

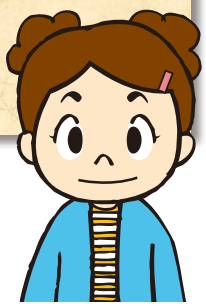
歌人　山口　茂吉

山口茂吉は、明治35年（1902年）清水に生まれました。小学校を卒業してから東京に行き、短歌を勉強しました。アララギ派斉藤茂吉の弟子となり数多くのすぐれた短歌を作りました。

東京にいても、ふるさとのことはわすれず、その思いは歌集「杉原」にこめられました。

昭和33年（1958年）56歳で亡くなりましたが、彼のたましいは、ふるさとの文化に灯をともし、いつまでもふるさとの豊かな自然を見守っているかのようです。

春の雪　峰降りしつつ　寒からむ
　　わがふるさとの　村を思へば
我が生まれし　杉原谷に　棲む鹿は
　　昼さへ村に　いでにけるかも



他に杉原紙を復活させた人、鍛冶屋線を西脇からひくことに尽力した人、親孝行をした人もいます。調べてみましょう。

山田勢三郎、夏梅太郎右衛門、門脇政夫さんについては、ふるさとの偉人のページにのせてあるので、読んでみましょう。